

雲南ビルマ戦線撤退、

終戦、復員まで

大阪府 岩屋明治

昭和十九年五月十日、西部第五十四部隊輜重兵十八連隊に教育召集。昭和十九年八月十五日、召集解除される。

昭和十九年九月十日、長崎県大村歩兵第四十六連隊に召集、同日小学校仮兵舎に分宿する。

十五日、長崎港より乗船、台湾・高雄經由マニラ新嘉波（シンガポール）港上陸、マレー半島を鉄道にて北上、ノンワラ、ドック、泰緬鉄道の分岐点、モールメン、ペーグトング、マンダレー經由、ラシオ駅に到着。駅前広場にて約一時間待機中に握り飯を一人当り六個受領。水筒に水を補給して夕方七時頃だったと思う。輜重隊の車両三十五台に分乗。途中、ナンカン、腕町を通過して芒市に到着したのは十月十八日の昼頃

だったと思う。

各部隊の将校一人、下士官二人が歩兵、工兵、山砲、野砲、騎兵、輜重通信兵、衛生兵、無線の各部隊の補充要員受領、引率して帰って行った。

私は輜重兵百三十人を引率して、受領の将校、下士官、兵と共に、芒市駐留の師団輜重、一中隊、二中隊、三中隊、四中隊に振り分けられ、私は連隊本部付きとなる。

早速、副官に着任の申告のため本部に到着した。私達補充要員を輸送していた自動車は各中隊に戻って行った。

私の任務は連隊付き将校として第一中隊、第二中隊、第三中隊、第四中隊の車両および鞍馬、駄馬の確保と乗用車の確保等および自動車の出動、軍馬の出動の要請に応じ、これに対処する等である。

その間、十一月三日、工兵連隊長の小室中佐守備の龍陵が敵軍に占領された責任をとり中佐自ら自決されました。代わりに歩兵第百十三連隊第八中隊長石田徳二郎大尉が守備隊長に着任した。

龍陵から撤退した第三大隊は歩兵第一百十三連隊に復帰したが、休養の暇も無く崎山陣地の守備についた。中国重慶遠征軍は七個師団約七万の兵力をもって龍陵を占領し、十一月中に日本軍を撤退させるために包囲作戦の総攻撃を開始した。グラマン戦闘機等で毎日攻撃され、我が方の損害は甚大にて、半数以上が損害を受け、実際には全滅に近い損害を受けた。

昭和二十年一月頃より敵遠征軍は後方遮断を図り、兵器弾薬を空輸投下して進出して来た。このため当時、第四中隊自動車輿村小隊はクツカイ、パンカイの陣地守備に就いていた。

敵の輸送機の物量投下が夕方になって終わると間もなく、迫撃砲弾が公路道に着弾、軍路道はいたる所破壊されて自動車の通行は不可能になった。また第二中隊の車両は敵の迫撃砲の直撃弾を受けて道路下に転落し、約十両の内五両が使用不可能になった。また日時が明確ではないがナンカン、腕町(ワンチン)へ物資輸送中の第三中隊の車両が敵迫撃砲の攻撃を受け被弾した。

当時、腕町は寺田部隊が警備中であつた。我が軍は第三十三軍司令官の命令により龍陵放棄となり芒市周辺の防御となつたが、情勢の変化によりビルマ国境の腕町において持久戦を行うよう作戦任務が変更された。傍受電によれば遠征軍は十一月十八日、十九日かけて、芒市総攻撃を企画していた。しかし第五十六師団はこの総攻撃に一撃を加え、二十二日から二十四日の間に逐次芒市付近から撤退する予定であつた。

敵の総攻撃は十九年十一月十九日夜から開始された。第三十三軍司令部高級參謀辻政信大佐の「勝算なし」との意見に軍司令部各部隊には十九日急遽撤退が命じられた。私は昭和十九年十月十八日連隊本部に着任したばかりで師団經理部より連隊本部宛に糧秣三トンを龍陵守備隊に輸送する命を受けた。龍陵市街入口の龍陵峠付近までの輸送の命令である。

十月三十一日夕方五時頃だつたと思う。出発準備のため芒市の野戦倉庫へ直行し、第一中隊長、第二中隊長に協力要請を行い、兵六十三人、下士官三人の編成で、陽も落ちた真つ暗の中で百俵の麻袋を百二十俵に

入れ替えた。これを駄馬の鞍の両脇に、幾分でも馬の負担を軽くするために細長くたらし夜行軍にて出発する。公路は二千メートル級の連山で、山裾の道を一気に突き走る。山の稜線に敵兵がウロウロしており、いつ、どこから射撃してくるかわからない。携帯灯をつけようものなら敵機関銃の一斉射撃で一たまりもないので懐中電灯を下士官三人に持たせて行軍をした。

到る所に敵飛行機の爆撃で大きな穴が出来ており、何度となく駄馬がけつまづき何頭か倒れ、馬がいなないて困り果てました。山裾をうねりくねりして龍陵市街入口の龍陵時にさしかかり、ここを通り過ぎたころ、我が輜重隊の物資集積地友軍の兵隊である第三大隊の行李班の上等兵、苦力の二名が集積地に誘導してくれた。

ここで責任者の貝島中尉殿に報告、そして三十分位休息し、馬にも水、馬糧を与えた。夜の明けぬ間に芒市に帰隊することにしたが、途中敵の待ち伏せに会うことが予想されたので、龍陵峠を降りて公路上に出てから尖兵斥候として山本軍曹、吉本上等兵、安永兵長

の三名を三百メートル位先行させた。もし異常のある場合は一名が連絡すること、合言葉は「梨」「十郎」と決めた。兵と兵との間隔は三十メートル位にして進むように言い聞かせた。二時間位前進して中隊を一端停止して前方を見ると、約二、三百名ぐらいの軽機関銃二挺を持った部隊が曲がりくねった壁下にひそみ、待ち伏せしているとの連絡があった。

三百メートル位後退して右側三百メートル位の山裾に広がる芦の草原を迂回し、おおよそ目算で二千メートル位隠密行動しつつ敵の射撃攻撃が届かない所まで前進した。

強行軍で本道の公路上に出て、夜の明けぬ間に芒市の野戦倉庫に帰着、直ちに連隊本部の経理部長宮本中佐に報告した。「中隊を解散して各中隊に帰隊させよ」との命令で、各隊に帰隊させた。時は十一月一日、夜明けの東の空が薄明るくなった六時頃で、重大な任務を果たした満足感にあふれた。

昭和十九年十一月ごろ、第三十三軍司令官は第五十六師団に対して、龍陵放棄の命を下して芒市周辺の防

御を命じた。しかしその後情勢の変化により、ビルマ国境の腕町において持久戦に突入する作戦を命じた。敵の総攻撃は、昭和十九年十一月十九日夜明けから開始された。軍司令部は各部隊に十九日中に「早急に撤退すべし」と発令した。

各部隊は昭和二十年の正月は腕町で迎えた。歩兵百十三連隊長松井少将は昭和十九年十二月十八日付きでビルマ方面軍司令部付となり、後任に大須賀大佐が十二月三日着任した。昭和二十年一月五日五鈴山山麓にて連隊本部全員が整列し、挙手の礼を続けつつ涙の中で松井少将を見送ったのである。

腕町が主戦場だった各部隊は、一月二十五日師団より撤退命令を受ける。各部隊（連隊）主力は、一月十七日腕町の南西部都市ナンカッパ北方サンパーブに兵力を集結する。龍兵団第五十六師団は昭和十七年五月以来満二年九カ月振りに雲南省駐留地から完全撤退した。ビルマ方面軍は昭和二十年五月上旬頃から患者や作戦に必要な後方部隊を、ケマピユよりサルウン河を渡河し、タイ国チェンマイに後退するように指示し

た。軍は終戦前（八月十五日）、師団のみならずタイ国駐留第三十九軍はチェンマイに延べ五十万人分の糧秣を確保するように、境部隊方面軍貨物廠に命じた。

昭和二十年六月二日付をもって、私は陸軍少尉に任官した。また境部隊より三十名をタイ国クンヤムに派遣した。

第五十六連隊輜重隊は、二十年六月一日ごろよりビルマ、ケマピユよりタイ国領ワンユムへ患者八百名の輸送を命ぜられた。患者輸送促進のため連隊本部西山中尉をケマピユに派遣した。龍兵団の第一野戦病院はサルウン河の対岸チョベニーに第一患者中継所を設け、タイ国チェンマイまでの経路として、クンヤムを起点とした北廻り三百六十キロ、南廻り二百七十キロ、中央を通る中廻り百八十キロであった。ケマピユよりクンヤムまでは約五十キロの行程である。昭和二十年八月十五日頃だと思いが記憶は定かではない。輜重兵第五十六連隊池田部隊本部はビルマ領ナンペの北方四十キロにありて残存部隊を指揮し、患者輸送および糧秣の護送と後方担当の地区警備に任じていた。

八月二十二日師団長は各部隊に対し、タイ国領チェンマイに集結を命じた。師団は各部隊のタイ国領チェンマイ集結のため撤退路偵察のための要員として師団命令として輻重兵五十六連隊池田部隊本部付き野口中尉を軍司令部に派遣した。師団司令部は撤退路偵察隊の要員として各部隊より將校一名、經理部、獣医部、軍医部より將校一名、兵は各部隊より一名づつにより野口中尉隊長以下四十名の偵察隊を編成した。北廻り、中廻り、南廻りの撤退路の地図を作成し、これらをつなぎ合わせて大きな一枚の地図を造り上げ、バンビヤンまでが出来上がった。

バンビヤンからチェンマイまでは自動車用道路で偵察の必要なしと判断して、出発地点のナンペに帰隊することが出来た。北廻りはメーホーソンホイバーには患者輸送中継所を設立した。南廻りはメサリアン等数カ所に中継所を設立、中廻りはメナチョン、バンカツに中継所を設立した。この撤退路を通ってタイ国チェンマイに到着した兵隊は約三万名位であったと思う。また菊兵団第十八師団も残存部隊をタイ国チェンマイ

に集結した。勇兵団(第二師団)、祭兵団(第十五師団)、弓兵団(第三三師団)も同じである。安兵団(第五三師団)歩兵第百十三連隊(大須賀部隊)主力は、十月二十日頃にチェンマイに到着した。輻重兵第五十六連隊主力および残存部隊も十一月月上旬に集結を終わった。

チェンマイはタイ国の首都バンコク北方六百キロの位置にあり、メピン河畔の古都で、チェンマイ県都としてタイ国北部最大の町である。武装解除はバンカツで行われ、私物の軍刀や拳銃も撤退中にメナム河に投げ捨て丸腰であった。軍服はぼろぼろで浮浪者同然の姿であった。將校連中は多少は良かったが、下士官、兵隊はあわれであった。

チェンマイには一カ月も駐留することなく、ナコンナヨークに集結を命じられた。十一月十九日チェンマイを出発する。北の端から六百キロの長旅であった。

十一月二十三日ラウンバン到着。この間五日間の山岳地帯の旅であった。ラウンバンはタイ国第三番目の都会であまり高い山岳地帯もなく平原の旅であった。

十二月二十三日、クローカンで休養、メナム河沿いの南の旅が続く。

十二月二十五日、ナコンサワン—ノンホイ間は列車で移動した。十二月二十七日はバンナの寺院で宿泊する。十二月三十日ナコンナヨークに到着する。ナコンナヨークはタイ国の首都バンコクの東北百四十キロの地点である。実に四十日間の長旅であった。我々は前部隊の既設の兵舎に入った。この宿舎はイギリス軍が捕虜収容所の予定で建設し、有刺鉄線で兵舎の周囲を張り巡らしていた。

けれど部隊全員は捕虜になったという意識はなかった。ビルマ戦線で最強の兵団として最後まで戦いを交え、敵遠征軍およびイギリス軍、アメリカ軍を最後までふるえあがらせた日本軍最強の九州兵団で、敗戦の意識は全くなく元氣旺盛である。ナコンナヨーク周辺には第十五軍司令部（森）、第十五師団司令部（祭）、第五十六師団司令部（龍）が収容されていた。兵団は連隊単位で自主管理であった。

収容所表門には歩哨が立っていたが、丸腰であり通

行は自由であった。我々捕虜には強制労働はなかったが、自主的には道路の作業が各隊に割り当てられ、一日の労働時間は三時間程であった。給与面では定量以下であったが、野菜や肉が少しづつ支給されたので栄養失調にはならなかった。

ナコンナヨークでの捕虜生活も六カ月ほどで終わり、いよいよ復員の日が近づいてきた。昭和二十一年五月十四日、ナコンナヨーク出発、五月十六日、列車でバンコクに到着、直ちに乗船することになった。

五月十七日出帆、ゆっくりとメナム河を下り、河畔の椰子林は果てることなく続き、船から眺めるこの風景もこれが最後で、終生忘れることない風景であった。船は一路南下してアンダマン海に出て内地の港を目指して進んで行く。どこの港に着くやら、長い思い出、一生忘れ得ぬ戦争の面影を脳裏に刻み、去来する種々の出来事を捨て去って、九州佐世保港に上陸し、復員した。